

『立命館大学人文科学研究所紀要』100号 刊行記念座談会

2012年12月7日開催

共同研究の将来を見すえて
—— 過去の蓄積からその先へ ——

[参加者]

赤澤史朗（法学部教授・「近代日本思想史研究会」代表者）

加國尚志（文学部教授・「暴力からの人間存在の回復研究会」代表者）

篠田武司（産業社会学部教授・「グローバル化と公共性研究会」前代表者）

谷 徹（文学部教授・「間文化現象学研究会」代表者）

藤巻正己（文学部教授・「グローバル化とアジアの観光研究会」代表者）

[司会]

小関素明（文学部教授・人文科学研究所長）

はじめに

—— 過去の蓄積からその先へ

小関：人文科学研究所の戦略拠点研究会の代表の各先生方、本日はどうもお忙しいなかお集まりいただき、ありがとうございます。おかげさまをもちまして、この度『人文科学研究所紀要』も第100号を刊行する運びとなりました。先生方の後ろの棚に、リサーチオフィスの中島久美子さんに第1号から第98号まで並べていただいたのですが、第1号の刊行は1953年です。第4号ぐらいまでは年1号なのですが、1950年代の後半から年2号ないし3号を刊行するようになりました。これだけ並ぶとなかなか壮観です。この左側には共同研究の成果としての人文科学研究所の叢書も19号分並べてあります。

紀要を支えてきたのは何といっても共同研究です。ただ昔は研究会の数も少なく、参加する研究者が相互によく知っているという状態だったのですが、それ以後研究所の数が増えたりとか、学内のスタッフが増えてきて、研究会の数が非常に多くなりました。それにとまってお互いをほとん

立命館大学人文科学研究所紀要



創刊号



ど知らないという状態になっていますので、紀要100号の刊行を記念して、今後、共同研究を充実させるためにも、所内の研究会で各先生方がどのような研究をされているかを知ること必要かなと考え、こういう会を企画させていただきました。先生方の共同研究に対する思いを



立命館大学人文科学研究所叢書 1輯～19輯

を中心に、できるだけ前向きのお話をいただけたらと思います。そうする中で、人文社会科学の底力みたいなものを感触として確かめられればと考えています。

進め方なのですが、各研究会の概略については事前に文書をいただいていますので（本号所収）、それに関して私が少し話題を振らせていただき、それにお答えいただく形でお話をいただき、そのあとご自由にご議論いただければと思います。

最初に「グローバル化とアジアの観光研究会」代表の藤巻正己先生にお尋ねしますが、ご寄稿いただいた文書に、研究会の外への広がりということに関して、学外研究者をコアメンバーにされているということ、あるいは国内およびアジア諸国の研究者との間でツーリズムをテーマにした研究のプラットフォーム作りをしているということが書いてあったのですが、その辺についてちょっとご説明いただけませんか。

I. 「間」への視座－ツーリズム・間文化－

藤巻：提出した文書に書きましたように、私どもの「グローバル化とアジアの観光研究会」には前史がありまして、江口信清先生（本学文学部）が代表

となって1990年代の半ばに貧困をテーマにした研究会が立ちあげられました。その研究会は当初から学内にとどまることなく、学外の研究者を巻き込むかたちで作り上げられたということがまず基礎にあるのです。それを母体にくつつかの段階を踏んで今日に至っているのです。私どもの研究会を縦に貫き通している対象と関心は



小関 素明 (文学部教授・人文科学研究所長)

貧困問題であり、貧困層を構成するエスニックマイノリティなどの周辺的な社会集団です。そして最近では、外国人労働者も視野に入れています。そういった研究を展開していく中で、「貧困の文化研究会」でコアであった人々が、その時々の研究課題に関連する人々を巻き込むかたちで雪だるま式に研究メンバーが増え、今日に至っています。そして結果的には学外者がメンバーの大半を占めているというわけです。

私どもはもちろん学内の関連する研究に携わっている人々にも声を掛けたり、あるいはセミナーなどさまざまな研究集会を通じて、呼びかけをしてきたのですが、ある意味ではコアメンバーのコアが強くなりすぎて、ちょっと学内の先生方が入りづらくなったのかなというネガティブな面もなくはありません。しかしポジティブに考えますと、先ほども申しましたように、コアメンバーが関連する人々を呼び込み、その人々を通じてまたさらなる学外の人々を取り込むというプロセスをたどったことが研究会活動を長続きさせたのではないかと思います。さらに研究の視点の広がりから考えますと、文化人類学、人文地理学あるいは社会学等々、広汎な領域の研究者がいろいろな地域、大学から参画してくれたことによって、私たちの研究の視野も随分拡大したかなというふうに思います。加えて外国の研究者ともセミ

ナーを開いたりシンポジウムを開催しました。こういった人々が先ほど、小関さんから紹介がありましたように、周辺の社会集団と観光との関わりをテーマにした研究プラットフォーム構築に非常に大きく貢献してくれているというふうを考えているところです。

小関：なるほど。非常に理想的な研究会のメンバーの拡大の仕方を実践しておられるようにお見受けします。それに伴って、当初スラム社会の歴史もしくは文化の歴史という、どちらかというコアの部分の研究されていたのが、今はツーリズムというゲストとホストという視点を取り込んだ「関係の歴史」という方向に問題関心を移しておられるようにお見受けするのですが、そうだとすればそれによって見えてきたものとか、そういうことについてさらにお話しただけないでしょうか。

藤巻：今、ホストとゲストの「関係の歴史」というご指摘をうけて、改めてそうだったなというふうに思うところがあるのですが、結局貧困問題であれ、スラムの問題であれ、それから観光の現場におけるさまざまなアクターたちのせめぎ合いという点を考えましても、やっぱり人間と人間との関係性の中で貧困問題が解釈されたり、あるいはスラムの問題が解釈されるという点が重要だと思います。その意味では、まさに人文学的な考え方に沿った研究枠組みを以って、一連の研究活動を継続させてきたのかなというふうに今思うところです。実際、いろんな現象といいますものも、結局は現場における人と人との間で生成されるものでありますから、それをいかに解釈するのかというところから、我々がそれまで「そうに違いない」と思っていたいろんな解釈の仕方も意外とそうでなかったとか、改めて



藤巻 正己（文学部教授）

知らされるという経験をたびたびしてきました。今の「グローバル化とアジアの観光研究会」も、ツーリストであるとか、外国人労働者であるとか、それから地元のいわゆる社会の住民やホスト社会などとの関係性の中で、ツーリズムあるいはツーリズムを支える周辺的社会集団のあり方を捉えようとしている点では、今ご指摘を受けて改めてその意味について考えたところがあります。どうもありがとうございます。

小関：先生方に事前にご提出いただいた文章を通して思ったのは、今の「関係性」という点は、谷徹先生主宰の、「間文化現象学研究会」が重視しておられる「関係性」というものとも絡むのではないかということです。「間」という中には視線の問題も含めた対象との関わりを考察するっていう、そういうこと考えるのに大きく関わるでしょうし、あるいは松下冽先生、篠田武司先生が主宰しておられる「グローバル化と公共性研究会」の関心とも絡まるような視座を含んでいて、問題関心の焦点化という意味では、みんな同じことを考え始めているのかなっていうことを感じたのですが、その辺について先生方いかがでしょうか。

谷：今のお話を受けまして、さすが小関先生、注目しておられる部分がいいなと思ったのは、ゲストとホストという関係です。ご存じだとは思いますが、ゲストとホストっていうのは、語源的には同じ言葉から出ています。フランス語のオートっていう言葉はゲスト、ホストの両方を意味する言葉です。ところが、そこから一方では、ホスピタリティという言葉が出てきて、もう片一方ではホスティリティという言葉が出てきて、意味がまったく逆になるのですね。その辺りが非常におもしろいところです。

どうということかと言うと、それまでゲストであったものが、状況が変われば敵になってしまうということです。つまり「ゲストとして歓待する」というホスピタリティを示していたその当の相手が、一瞬のうちにホスティリティの相手、敵意の相手になってしまうということが一方で起きます。あるいは、そもそも、それまでゲストであったものが今度ホストになる、ホスト

であったものがゲストになる、こういうひっくり返しも絶えず起きうると思うのです。われわれ外部から見ると、例えば当地に住んでいる人がホストで、当地を訪れる人がゲストですが、しかし、この両者が複雑に入れ替わる関係ってというのは恐らくあるのだろうというふうに推測するわけですね。この時に先ほど小関先生が言われた、ある意味で視線の問題、つまり訪れる人は同一であっても、その人を住人たちがホスピタリティの態度で見たり、あるいは逆にホステリリティをもって見ることも十分起こりうるのですね。貧困というような問題になれば、貧困層に関しては自分がなかなかゲストになる、外へ出ていくっていうことは、起きにくいっていうことはあるかもしれませんが、しかし理屈上は十分にありうることだと思います。

そういうような関係性、例えば京都をとっても、われわれがゲストを迎え入れると同時に、またわれわれ自身が今度ゲストになるというような関係が複雑に絡み合っています。そこにはさまざまな反転関係が生じるでしょう。この点で、藤巻先生たちの研究グループの取り組んでおられることというのは非常に示唆に富んでいると個人的に思いました。

小関：私もそう感じました。ダークツーリズムの話なんかは、要するに結局それまで被災地を助けてくれる人たちが、被災地を観光の材料にして物見遊山みたいに行くようになると、その人の意識に変化のあるなしは別にして、ダークなツーリズムに転位するということですよ。

藤巻：そういう側面はありますよね。今のホスピタリティとホステリリティの話はおもしろいですね。要するにわれわれはある意味では観る側を演じるわけですが、しかしフィールド経験に照らして言うと、地元の人々から観られている、むしろ逆に相手のほうから観られているということは常に意識しているところはあるのですよね。貧困という問題の取り上げ方でいうと、われわれは固定観念的に貧困はこうであるに違いないという「前提」を持ってフィールドへ入っていくのだけれども、相手との関係性の中で、われわれが考えている貧困とはいったいなんだったのかとか、逆に向こうから問われ

て反省を迫られることもあります。常にそういったせめぎ合いの中で私たちはあれこれ模索してきたって感じです。加えて今、谷先生からのご指摘で、また新しい、「あ、そうだったのか」と気づかされる点がありました。どうもありがとうございます。

篠田：関連して発言します。うちの研究会「グローバル化と公共性研究会」の関心との関連で言えばツーリズムっていうのは2つの面があると思います。1つは受け入れる側の地域コミュニティのエンパワーメントというか、再生の問題ですね。貧困が問題となる途上国におけるツーリズムっていうのは極めてそういう要素が強いのではないのでしょうか。もう1つ、ヨーロッパ辺りのツーリズム研究でなされているのは、人の移動なわけですね。人が移動することによってそこにおける新たな市民、さらには新たな公共性がリージョンとどういう関係において形成されるかっていうね、そんな議論がヨーロッパではかなり多いのですよね。

それを「グローバル化と公共性」という観点から捉え直してみた場合、グローバルなレベルでどういう公共性が作られていくのかという問題も第1にツーリズムとの関連が重要になってくるのではないかと思うわけです。つまり人が移動することによってEUっていうリージョンにおいて「ヨーロッパ人」がどのように形成されてくるのか。アジアでいうならば、アジア人っていうのがどういうかたちで形成されるのか。アジア人が観光で他のアジアの地域に行った時に、そこで「異文化」っていうのをどういう感覚で受け取るのか。意外と、アジアに行って「アジア好き」になったって人が若い人には多いと思いますね。その中で、アジア人とかグローバル市民でもいいのですが、日本人なら日本人というレベルを超えた、つまりナショナルレベルを超えた、何か1つの真のアイデンティティ形成がありうるのかなということを考えてみます。

そういう点でツーリズムというのは、われわれの研究グループにとっても非常におもしろい研究課題だと思っています。

小関：そのように見るとツーリズムという観点から考えられる範囲や射程が非常に広がりますね。今言われたグローバルな中での新たな市民っていう話は、非常におもしろいのですが、ちょっと後にとっておきたい(笑)。

今後のテーマの継続性とか、あるいは大きな研究課題の中で具体的テーマを少しずつ更新していくってということに関して、藤巻先生の研究会では、例えばどういうこと今後お考えになっているのでしょうか

藤巻：まだやっぱりいろいろな課題があるのですが、やはり当面ツーリズムというものが一方の柱にあり、他方では、先ほどから話題になっているような観光の現場における人間相互の関係ですね。そうした関係性というものがやっぱり大きな課題になってくるのは間違いないことです。強いて広がりを考えるならば、もう少し大きなテーマで、21世紀的な諸課題があると思います。例えば多民族共生であるとか、かなり手垢付いていますけれど、環境問題であるとか、倫理的な、いわゆる公共という問題も含まれてくるものですが、そういった諸課題とツーリズムとを結び付けて検討するなかで何が見えてくるのかということが重要な課題です。もちろん貧困問題は、ずっと21世紀の課題であるわけです。それを含め、それらの問題群がツーリズムとどういうふうに絡んでくるのか。これが私たちの研究会の大きなテーマでありつづけることは間違いありません。

小関：なるほど。それはまさにすべての研究会に絡みそうな関心ですよ。

藤巻：はい。ですから、今回研究代表者の先生方の書かれたものを拝見しましても、例えば谷先生がお書きになっている「間文化」という考え方など、非常に勉強になり、刺激を受けました。それから、「グローバル化と公共性研究会」のローカル、リージョナル、グローバルという、このいわゆる空間的スケールにおける三層構造の関わりという視座など、これもやっぱりツーリズムにすっぽり関わってくるのですよね。重要なコンセプトというか、枠組みをいただいた感じがします。そういう視点で、あらためて私たちの研究会の今後の活動というのを仕切り直しをしていきたいと考えています。

Ⅱ. 若手研究者の育成と「間世代」への期待

小関：話は少し変わりますが、若手研究者の育成ということに関しまして、各先生方のお話を伺いたいと思います。これは衣笠総合研究機構所属の全研究所のテーマになっていて、中々難題ですが、若手研究者のエネルギーは素晴らしい。例えば、藤巻先生の研究会所属の若手研究者である雨森直也さんがフィールドワークについてお書きになった文章に、2ヶ月で、中国・雲南省に暮らすペー族の2つの村で850世帯以上の家庭を訪れたとお書きになっていますが、すごいエネルギーですね。850世帯って一口に言うのは簡単ですが、一つ一つ回ることを想像したら、ものすごい労力だと思います。

その他にも、例えば彼等が漢民族に対してある偏見を持っていることについての調査も印象的でした。偏見自体は非常に悩ましいことなのですが、その偏見もある種彼らの生活に密着した、そこで育まれた「偏見」だということになると、直ちに断罪するのではなく、ちょっと考えてみないといけない問題が含まれている気が私なんかはしました。そういうこととか、あるいは、井澤友美さんの文章など、現地に住まないとわからないような体験が記されていて、若手研究者の豊富な体験に迫力と気迫を感じました。そういう点を踏まえた若手研究者の育て方ということに関しては、藤巻先生の研究会ではどのようにお考えなのでしょうか。

藤巻：私どもの研究会は、他の研究会に比べますと、明らかに若手メンバーが少ないのですね。みんなどんどん高齢化が進みましてね。若手を呼び込もうと思っているのですが、なかなか私たちのこのプロジェクトについてこれられないのが実情です。で、結局、今回2本寄稿させていただいた2人の大学院生が、ずっとこの数年間一緒にやってきてくれて、その分彼らはある意味で研究所の研究資金を使って中国やバリでかなり濃密な調査をしています。二人が潤沢な研究資金をもらって、その分良い研究をさせてもらったというのはありがたいことではあります。彼ら自身はある意味ではこちらの方で手

をかけずとも、自分たちで自由にやっていける一人前のフィールドワーカーですので、こちらのほうはただ温かく見守ってただけです。研究発表する機会とか執筆する機会をどんどん設けて、そこで鍛錬してもらおうということを、これまで同様に、今後も続けていきたいと考えます。

しかしコアメンバーの高齢化問題と、彼等につづく若手研究者が少ないのが悩ましい点です。外部の方の出入りは結構あるのです。こうした人たちが意外と頑張ってくれているのです。これに関しては、なにかジンクスがあるようです。と言うのは、私どもの研究会に2、3年関わっていると、どこかの大学に就職が決まるという、よい意味でのジンクスらしいです（笑）。ここ数年、確かにそうなのです。だから、若手研究者が外部から来ても、そうそうは居着かないのですね（笑）。

小関：それはうらやましい面もありますが、高齢化ということに関しては、「グローバル化と公共性研究会」の文章の中にもコアメンバーの高齢化が著しいということを書いておられましたけれども、その辺なんかはある程度共通した悩みでもあります。

谷：今の点に関連して、われわれの研究会はまだ新しいので、高齢化問題というのは直接にはまだ生じてないというか、私一人が高齢化しているという程度です（笑）。

むしろ世代を越えるというのが重要です。と言うのは、われわれのプロジェクトは、実は科研費プロジェクトと連動しています。その科研費プロジェクトの方が「多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究」という題名になっていることから解りますように、世代というのはすごく重要だと思うのです。なぜなら、われわれが何らかの意味で文化に関わる場合、文化というのは、必ず間世的な現象で、つまり、一世代だけの文化というのはおそらく定義に反すると思うのです。文化は間世的な仕方ではありえない。これに含意されるのは、研究という態度自体も、広い意味で、一種の文化だということです。つまり、研究というのは文

化を外から見るというよりも、文化の中に巻き込まれながら、文化の運動の中である種の応答関係を探っていると思うのですね。だから、適切な応答関係を探るためには、文化が間世代的なものであるならば、それに対する研究のほうもやはり間世代的でなきゃいかんだろうと思うわけです。そういう意味で、幅広い世代による研究の推進というのは、必要不可欠だと私は思っております。

小関：その世代も“間”として捉える必要があるということですね。

谷：そうです。どうしても文化問題というと、外国と言いましょか、ある種空間的な広がりと考えますけれども、でも文化というのは外国においてそのまま無時間的にそこにポコッと存在しているものではなくて、その中の内的時間性・内的歴史性というのがあると思うのですね。その上で、今やグローバル化と言っていいのかわかりませんが、様々な仕方でも文化的な交流が起きてくるとなると、それは空間的な相互関係を及ぼし合い、同時に世代の繋がりの中で動いていくという輻湊関係を持ちます。そうすると、実に多様な、つまり一つの文化の内的変化だけで済まないような、複雑な、クロス掛けと言いましょかね、そういうものを含んだ世代性を作っていくのではないのでしょうか。

小関：確かに空間的・時間的な相互関係の輻湊で文化は成り立っていますね。

谷：それが間世代性、間世代的な間文化性という言葉で言われるようなものになってくるのであろうと、個人的に思います。そして、われわれの研究もその運動の中に巻き込まれつつ、それに応答する形を取っているのです。

Ⅲ. 交流の可能性の探求

小関：今のお話しとの関係で言うならば、例えばかつてアジアでの市民社会の研究というのがありましたね。市民社会というのは西洋社会のもので、アジアには市民社会を成熟させる土壌がないとしてきた固定観念のなかで、ア

ジアにも市民社会というものの育む余地があるかも知れないという問題意識に立った研究でしたが、市民社会自体の評価とは別に、そうした研究潮流は今のお話しと気脈を通じますよね。

谷：そうですね。市民社会も一つの例ですね。ただこれは一つだけの例に限らない。すべてにおいて同じ事が起きてくる、というふうに思います。

小関：だから、逆に言うと、市民社会というものの有効性がアジアの中でも審級に晒されるということになりますよね。

谷：そうです。でも、その時同時にその市民社会という理念そのものが変わっていくと思います。ですから、この今の状況の中では固定性というのはあまり有効でない。すべて流動的になってしまうとまでは申しませんが。絶えず関係の中で一定の多面性とでも呼びましようか、そういうものを示すようなあり方をしてくるのだらうなと思います。

小関：なるほど。その話に移ったところで、谷先生が主宰しておられる「間文化現象学研究会」のお話しを伺いたいと思うのですが、ここはやっぱり問題意識と視座が鮮明なのだと思うのですね。間主体性というか、間主観性というか、そういう視座を柱に捉えておられて。それは認識論的には対象を捉える「視点そのものを研究する」という研究姿勢だろうし、文化存在論的には、コアな自文化と他文化があってそれが交流すると見るのではなくて、そもそもコアな自文化とかそういう捉え方をしないという姿勢ですね。間に間文化があるというのではなくて、極言すれば、文化というのは本質的にハイブリッドなものであると言う捉え方とも言えましようか。「文化はすべて間文化に過ぎない」というとちょっと語弊があるのですが、常に重層的、流動的なものとして捉えようとされている。

文化を間文化として捉えようと思えば、現象学的に捉えざるを得ないので、文字通り「間文化現象学研究会」となるわけですね。この辺の視点について、もう少し展開していただけないでしょうか。

谷：われわれの研究会の活動内容については、最初から「こうだ」というふ



谷 徹 (文学部教授)

うに言うのはいささか難しく、むしろ、非常に興味深い藤巻先生たちの研究にいわば乗っかるような仕方でも語ったほうがわかりやすいというところがあると思われましたので、先ほど敢えて発言させていただいたわけです。あのような姿勢でもって、文化と文化の間を研究していくというところが、一つのポイントになっていることは確かです。

もう一つ注意したいのは、われわれの研究というのは、自分の枠組みを相手のほうに持っていくような、そういうやり方は本質的にとりにくいのですね。絶えず新たに現れてくる、新たにわれわれを触発してくる、そういう問題に対して、応答していくという姿勢を取りたいと思います。ですから、言ってみればホモ・レスポンスとでも言うか (笑)。応答するという態度でもって、問題に関わっていく。つまり、向こうが先であって、こっちから方法的枠組みを付さないという態度でいきたいと思うのですね。

しかし、そのような仕方でもってわれわれが応答することによって、一定程度でも何か新しい知見、新しい何か洞察が出てきて、ひょっとしたらまた相手が新たな応答を返してくれるかもしれない。こういう応答関係の中でのものを見ていきたいというのが、われわれが重視している「間」ということです。でもその時に、場合によって、われわれの出しているものが拒絶される、あるいは逆に向こうが出してくるものをわれわれが拒絶することも起こりうる。この時、受け入れ・拒絶のいわば「開く速度」・「閉じる速度」というのもがもうひとつの問題になると思うのですが、速度の問題はさておいて、いずれにしても応答の両面性を同時に認めざるを得ないというふうにも思います。

ですから、間文化性というのは必ずしも間を開いていくだけでも限らな

い。場合によっては拒絶する、つまり、先程のツーリズムの例でいったら、来てもらっては困るということが十分にあり得るわけです。

小関：そうした拒絶や遮断も、いわば変則的な交流の一つだということですね。

谷：はい、それも交流の仕方だと思うのですね。そういうことも含めて、われわれの研究活動自身もその応答の中に入れていくような、要するに、一定の視野の枠、視点の枠を固定化した仕方で放り込まないようにするというのが、この間文化の現象学という考え方です。

小関：なるほど。これはやはり哲学的に言えば、二十世紀的な問題意識なのでしょうか。

谷：それはある意味でそうだと思います。しかもわりと新しいほうかもしれませんね。というのは、現象学という発想自身は、強い方法的枠組みを設定するものです。ところが、その現象学は、われわれが問題を設定する前に、向こうから様々な呼びかけがやってくるということをだんだん発見してきたわけです。そうすると、最初の方法的な枠組み自身が、それによって変化してしまふ。そういう形で展開してきたものが、間文化現象学という新しい形を取るようになったと私自身は考えます。

現象学自身はヨーロッパ中心主義的に発展してきましたが、それに対してわれわれは絶えず違和感持つわけですね。で、それに対するわれわれなりのなりの応答を求められたとき、これはもっと、われわれとヨーロッパだけの関係ではなくて、われわれと例えばアジアとの関係、その他様々なものとの関係の中で、お互いに応答し合うような、そういう研究方法を作っていくよりしょうがないというのが、この“間”ということものに問いを向けたもう一つの理由です。

小関：なるほど。それ、非常におもしろいですね。関係性もしくは現象学的というのは、僕なんか非常に魅力を感じるのですが、それは我々の認識とか存在をドグマから解放してくれるというか、そういうところが確かにある。

ただその一方で、何かとてつもない不安に駆られるようなところも逆にあります。

谷：そうなのです。

小関：なぜなら、人間の存在すら極論すれば所詮現象ですよ。人間の存在すら現象だし、“間”でしかないということになってくると、自分とはそもそも何なのかという、そういう不安に駆り立てられますよね。そういう不安に対しては、間文化的な思考もしくは現象学的な発想というのは、どういう応答されるのですかね。

谷：これは大変難しい問題で、つまり、私というのもある種の関係性でしかない。我々自身がある種の関係性でしかないということになってしまいますと、これを見つければOKというものはなくなりますね。で、最近のような不安な時代になると、若者たちは自分探しゲームみたいなことをやり始めて、「これが自分だ」と言い、集団的な形になりますと、「これが自分たちの文化だ」と言う傾向が見られます。

小関：あれも一つの不安から逃れるためのものなのではないでしょうか。

谷：むしろ不安から逃れるというよりは、不安であるということ的前提として受け容れることのほうが重要でしょう。不安が不安なのは、何が不安なのだかわからないということです。不安というのはつねにそういうものなのでしょうが、不安そのものを、言ってみればポジティブにという言葉が強すぎますが、当然のこととして受け容れ、逃げようとはしないことが必要ではないでしょうか。

小関：その点に関して言えば、村上春樹さんの小説なんかが若者に受け入れられるのは、「存在の不確かさ」みたいなものをクッと捕まえていて、そこに若者が共感することが大きいのでしょうか。非常におもしろい点だと思うのですが。

もう一つ、僕が読んでいて「あっ」と思ったのは、研究会でテキスト購読もされている、あるいはそれに基づいて討議をされているということをお書

きになっている点です。例えばどういうテキストをお読みになっているのでしょうか。

谷：具体的にはゲオルク・シュテンガーという、今、ウィーン大学の正教授ですが、彼が、Philosophie der Interkulturalität『間文化性の哲学』という本を出してしまっていて、すごく大きな本です。彼にはわれわれの研究にも協力してもらって、一緒にやっているのですが、彼のこの本を一つの手掛かりにしながら、次の研究へ繋げていこうという地道な活動をやっています。

また彼本人に来てもらって、さらに、われわれが問いを投げかけ、そして、向こうからの応答を得る。こういうのを繰り返しながら、お互いの研究に資するような、そういう形で研究を進めていきたいと考えています。

小関：その応答のプロセスまで再現すると、非常におもしろいですね。

谷：そうですね。ですから、その意味で、こういったら何ですけど、現在生きていて応答できる人の本というのがある意味でより重要になりますね。ですから、単なる古典研究ではない、ある種の未来志向型の研究というふうにご理解いただければと思います。

小関：今少し頭に浮かんだのは土曜講座のことです。土曜講座の場合は古典なんですけど、先頃古典を読むというシリーズを実施したところ、非常にたくさんの方が集まって下さいました。ウェーバーとかマルクスとかポランニーとかケインズを取り上げれば、普段7、80名のところが230~40という人が来るということは、やっぱりそういうところを求めているところがあるのだなと実感しました。

少し話が変わりますが、僕は研究会での講読と教育実践とを有機的に関連付けられないかと思っています。例えばここで為された読みのプロセスとか成果をそういうところに反映させられないでしょうか。例えばそこで学んだ若い人が、そういうところで講師を務めれば、教育実践の機会を持てるということにもなるし、教育力もつけられないでしょうか。

今大学で若い人の教育力を付けるためにどういう指導を試みようとしてい

るかという、相手の目を見てしゃべるとか、そういうノウハウみたいなことが多いのですよ。あんまりそういうことやっても教育力なんて上がらないだろうと僕は思います。プレゼンのいわゆるパフォーマンスはできても、やっぱり教育力というのは、本当に難しいものを読んで、それをいかに優しく語れるかという、その模索に尽きるのではないのでしょうか。

理想としては、研究会でもものを読んで、その自分の読みを、ここはこう読むのだということを、やっぱりみんなの前で投げかけてみるという、そういうことができたなら魅力的だなと思います。

IV. 人間の創造性を通約する試み

小関：では次に、加國先生主宰の「暴力からの人間存在の回復研究会」のお話を伺いたいと思います。

加國先生の研究会の関心で興味深いのは、人間存在の回復ということを中心に文化と結びつけておられる点ですよね。単なる生存条件ではなくて、表現として蓄積された文化の中に、人間の回復のあり方とか可能性を見るということなのですが、これもある種間主体的な見方、もしくは現象学的なアプ



加國 尚志 (文学部教授)

ローチと、何かシンクロしそうな感じがしたのですがいかがでしょうか。ここで文化というのは、鑄型のように存在する慣習とか風習とは違って、もう少し自覚的な、創造とか表現行為ですよ。その文化の中に人間存在の回復の糸口を見つけるということは、そもそもどういうことなのかということ、ちょっと展開していただけないでしょうか。

加國：私たちの研究会は、暴力論研究会としてかつて谷先生が代表をされていた研究会が母体になっています。そこでは、哲学だけではなくて、学際的な研究ということで、文学や教育学の先生も加わっていただいていたのですが、谷先生が間文化現象学の研究会を立ち上げられるにいたって、暴力論研究会の処遇について考えざるをえなかったわけです。暴力論研究会で培った学際的なネットワークをやはり継続でしていこうということで、それを再編する形で「暴力からの人間存在の回復研究会」として立ち上げたわけです。

ですので、ここでやろうとしているのは、哲学というよりむしろ、いろいろなジャンルの人が混ざって、何が出てくるかわからないのだけれども、とにかく混ぜ合わせてやってみようということが一つなのですね。もう一つは、文学の研究者ということで、竹山博英先生（本学文学部）とウェルズ恵子先生（同）に入っていただいています。お二方とも、イタリアとアメリカの民衆文化といますか、ある意味では民俗学なんかともリンクするようなご研究をされています。その他に教育人間学の鳶野克己先生（同）や福原浩之先生（同）にも加わっていただいています。ある意味では学際的であると同時に、今までのアカデミックな中で議論されてきたことと違う領域に取り組んでおられる先生方にご協力をいただいています。

特に関心があるのは、小関先生が上手く言ってくださったのですが、やはり人間の表現ですね。芸術であれ、文学であれ、文学研究というのは、人間が表現したものについて研究する、解釈する、そういうものですから、文学研究のアプローチが強く入っていますね。

もう一つ、暴力の問題を扱うのだけれども、以前の研究会は、暴力とは何かという哲学的な問題意識があったのですが、今回の研究会はどちらかというと文学の先生方にメインになっていただいているということもあって、実践的な関心にかかなりの比重を置いています。例えば竹山先生はプリモ・レーヴィの研究者でいらっやって、アウシュビッツから生き延びた後どのような生き方が可能かというテーマに取り組んでいらっやいます。ウェルズ先

生ですと、アメリカ黒人の音楽文化などマイノリティとして虐げられ続けてきた人たちがどういう文化を醸成したかというテーマに関心をお持ちで、そういう暴力的な目にあった人たちが、どういうふうに戻復を模索し実現してきたかということの研究されています。

学際的にその研究成果をクローズアップしてやっていくために、私はどちらかというとコーディネーターで、あまり哲学的に発言したり解釈したりするよりも、交流の場を用意することを重視しています。

そうすると、例えば文学と言いながら、ウェルズ先生のご専門では、民衆音楽が入ってきたりして、非常に刺激的です。例えば哲学というのはヨーロッパのハイカルチャーの極致みたいなものですから、今まで哲学では触れなかったようなものに触れる機会にもなります。学際的であるがゆえに、今までのアカデミズムの枠の中でできなかったことができる、そういう研究会になりつつあると思います。

小関：私なんかのイメージでいうと、文化というのは、先程からの話の繋がりでいくと、一方向的なものではなくて、あるものを投げかけて、それに対して応答があって、その応答と、投げかけ合いの中から何か育まれていくという流動体のようなものです。その育まれながら生成していくものの中に宿っている何か人間の生命力みたいな、そういうものへの眼差しが関心の柱になっているのかなという感じで読ませていただいたのですが、文化というものが人間存在を回復させるというについてももう少しお話しただけないでしょうか。

加國：これは別にアカデミックな経験でもなんでもないので、私の実家の近くの児童虐待を受けた子供たちのシェルターのようになっているところが出している会報みたいなものが時々来ます。その中に、そこの子供たちに何になりたいかと聞いたら、全員じゃないけれども、かなり多くの子供がシンガー、歌手になりたいと答えたと記されていました。それは、若いアイドルに憧れるとか、そういうような気持かもしれないけれども、例えば虐待を

受けているいろいろな精神的な傷を負っている、そういう人間が選ぶ表現手段というものがあって、それは必ずしもハイカルチャーに乗らないものであるわけですね。哲学で、非常に高尚なものを語ったりしますが、実はそうじゃないところに蓄積されているものに注目していくというのが、一つ発想としてあったわけですね。

そういう発想でコーディネートしながら、ウェルズ先生や竹山先生や鳶野先生、あるいは谷先生にさまざまな方々を呼んできていただいて、そういう場を作ろうとしているわけですね。まだまだ研究成果として具体的なものが出るというような、あるいは研究拠点のようなもの作れるところにはなっていないのですが、続けていると、いろいろなネットワークが出てきたり、さまざまな知見を得ることができます。私なんかもうほとんど自分の専門外の人々に来るのに付き合うことが多いわけですが、そうするといろいろな視座が開かれてきて、大きな刺激を受けることができます。

篠田：かなり実践的な活動をしておられて、現場の人からの発言の機会が多さがこの研究会の特色のようですね。

加國：そうですね。例えば研究者でも、ジョナサン・コールさんという方はイギリスの生理学者で、障害を持った方の研究をされてきた方です。この前ウェルズ先生がお呼びになった、マイコ・クボタ・トーキンさんを中心にするグループは、脳梗塞で倒れた方のそばで歌を歌うということをしてしています。そういう方々をお招きする機会もいいのですが、それに限定している訳ではなくて、現場主義だけでは必ずしもありません。

篠田：このテーマは、かなり現在の社会を反映しているのではないのでしょうか。暴力を広く捉えれば様々な暴力の形がある。それが今の社会の中では、極めて現実的にあらわれてきている。それに対して単なる医学的領域での対処だけではなくて、逆に医学から解放しないといけないような暴力の形態とか、癒しの形態とか、回復の形態があると思うのです。そういう形で最近様々な分野で研究されたり実践的に取り組まれている方がかなりおられて、

そうした方々とふれあう極めて学際的な研究会のようにお見受けします。

加國：篠田先生に、大変うまくフォローしていただいて、先ほどの発言で欠けていたところが補えました。まさに暴力の問題というのは、目に見える直接的な暴力で言えば戦争などです。しかしそれ以外にも、さっき挙げた虐待をはじめ、何より現代の日本で自殺をする人が年間3万人以上という事態がもう10年以上続いていて、十数年で40数万人も亡くなっているという、これは戦争よりひどいのではないのかという考え方も成り立ちます。40万人死ぬまで14年間以上戦争やっている国というのは少ないですよ。

それから鬱病について言えば、『鬱病の時代』という本を書かれた方もいらっしゃるんですが、とにかく患者が急増していて、その鬱病患者は精神科医のところに行って、鬱病の薬をもらうというパターンになってきているわけですが、そうすると人間の心の傷といいますか、それは医学の領域に持っていかれる。医学にだけまかせるのではなくて、文学や哲学や、あるいは心理学、心理学といってもどちらかというと教育に関わる部分、そこのところで何かアプローチできないかということは問題意識の通奏低音としてありますね。だから、考えるべき問題群はたくさんあります。いろいろな方に来ていただいて、皆様その問題については何か一家言もっていらっしゃる。そうして問題を広く捉えて、それらにもっと大胆にアプローチをしていけば、さっき藤巻先生がおっしゃったみたいに対象領域や人脈はどんどん拡大していく。そういう予想はありますけどね。

小関：先ほど話題になった「関係」もそうですけど、暴力も非常に広く捉えることが可能だし、必要ですよ。フィジカルなゲバルトだけでなく非物理的な暴力が社会の中に偏在していて、じゃあ何がそこからの人間存在の回復なのかということを考えてみると、考えるべきことは無数にあるという感じがします。

回復研に参加しておられる若手研究者である黒岡佳証さんが、普段哲学になじみのない他者にも理解できるような伝達する「コツ」をつかむという事

が研究者として重要だと言うことを書いておられるのですが、哲学の難解な議論を日常の社会生活のなかで感じる感触へと通約することが重要なのでしょうね。

加國：ここに彼が書いているように、哲学の中だけでやると、要するに専門用語だけで通じるわけです。専門用語をいかにわかっているかということになるのですが、それだけではだめです。でも、レベルも落としちゃダメということで、なかなか難しい要求になるのですが、他の領域にも通じる表現方法に習熟することは必要です。たとえば哲学の、哲学書を読んでいる中だけでは触れないような問題ですよ。脳梗塞の人がそばで歌を歌うのを聞いてちょっと回復したというような話というのは、哲学でどう考えるか。それは哲学の本の中にはなかなか出てこない。ウェルズ先生がお招きになった、ジャック・サンティーノさんだと、テロで亡くなった方の追悼はどういう風にやるのか、という話をされました。その死と追悼場面での問題とか、こういうものに哲学の学生が触れてそこからなにか考えるという事は非常に重要です。逆に、こちらも合田正人さんとか松葉祥一さんとか、フランス哲学の研究者に来ていただいて文学系の院生たちに何か考えてもらう。そういう場をもっともっと作り出したいと思っていて、それに向けていろいろな仕掛け



を考えたいと思います。

小関：なるほど。確かに自分を越えたものを想像するってなかなか「言うは易く行はるは難し」ですけれども、そういう場があるということは非常に刺激的ですね。

V. 「公共」の射程と新たな可能性を見据えて

小関：では次に「グローバル化と公共性研究会」の篠田先生にお話しをいただきたいと思います。この研究会は「公共研」の時代に僕も少し出たのですが、「公共（性）」というものに一貫してこだわっておられるのが特色です。提出していただいた文書を読ませていただくと、グローバル化というのは資本主義化によってもたらされるのであるという総括を一旦されていて、それに対する対抗原理のようなものが必要だというお考えかと思えます。その際に依然有効性が高い対抗原理として市民的公共性を重視しておられる。その市民的公共性の有効性を、グローバリズムの中で検証しようとしておられるのかなとお見受けしたのですけれども、そういう理解でいいでしょうか。



篠田 武司（産業社会学部教授）

グローバル市民社会ってということになるかと思うのですが、そこにこだわられる理由についてお話しいただけませんか

篠田：はい。今小関先生が言われたように、これは2002年から始まっている「公共性研究会」の後続の研究会ということになります。「公共性研究会」は、新自由主義が世界の大きな流れになって、そこで経済格差とか貧困とか

そういう社会的なレベルの問題が起きてきて、日本社会のレベルで言えば私利私欲とか利己主義とかそういうものが非常に蔓延していったと時代の中で活動を開始しました。日本の場合は利己主義が蔓延した社会のアトム化現象を、国家に統合しながらナショナリズムとして「克服」していくっていう方向性がたぶんあったと思うのですね。国家による「公」の占拠っていうか、そんな議論の流れが日本の場合は出てきた。それに対して、そうではないだろう、国家が「公」を独占するのではなくて、市民が個人として公共性を培っていくのが最も重要なことなのだという問題意識を提示したのが「公共性研究会」の特色で、そうした問題意識を本にまとめて成果を出しました。

それを引き継いで、2006年ぐらいからわれわれはもう少し「公共性」を一国のレベルじゃなくてグローバルなレベルで考えるべきじゃないかっていう問題意識を打ち出しました。それはやっぱりグローバル化って言うのが極めて急速に進展してきている現状の中で、一国レベルで市民的公共性を育むということではすまないだろうと考えたわけです。これが「グローバル化と公共性研究会」を立ち上げた問題意識です。しかし、これはなかなか難しいテーマです。なぜならグローバル化っていうのは、必ずしも世界全体がグローバル化しているわけじゃなくて、やっぱり今のところはEU化とかアジア化とかという言い方をされるように、リージョナル化として進んでいる側面が一方であるわけです。

われわれの研究会は最初グローバル化、そしてグローバルの市民社会とか、グローバルにおける公共性は何なのかっていう形で議論をはじめようとしたわけですが、やはりグローバル化って何なのかっていう議論からはじめないと、結局うまくグローバル市民社会もグローバル化における公共性も議論できないだろうっていうことになりまして、2006年に「グローバル化とは何か」ということについての成果を本にまとめて出版させていただきました。その後あらためてグローバル化をリージョン（region）のレベルに絞って、リージョンレベルにおける市民的公共性は何なのか、特にア

ジアにおいて、それが可能なかどうかという議論を展開し始めたわけですね。経済的に今アジアリージョンというのは極めて相互依存関係が強まって、これはもう抜き差しならない関係性を持ち始めているわけです。そうすると、リージョン内の経済的な問題はそれぞれの国内社会に様々な問題を引き起こしていくわけですね。

そうすると、あらためてリージョンレベルにおいて、そこで引き起こされる様々な社会問題をどういう形で解決していったらいいかっていうことを考えざるをえない。そして、そう考える時に、やはり担い手としてリージョンに生きる市民たちが重要になるだろう。しかし、問題は、そういう市民たちがいかにして自国のナショナリズムを超え、結びつきながら一つのリージョンとしての公共性を形成しうるかっていう可能性。極めて難しいだろうけど、可能性があるかどうかが重要となる。それをいま何とかして探ってみようとしているわけです。まずは、それぞれの国においてどういう運動があり、どういう議論があり、そこを確かめながらさらにそれらを全体としたら統合していけるかどうか確かめています。この2、3年研究会としてそういう議論にたどり着いてきたという現状です。

小関：先ほど谷先生の研究会のお話しのところで話題になったように、市民社会というのを西欧のものであるとか、あるいは排除の機能を持つという紋切り型の断罪をせずに、ある種「たすきがけ」のような形でアジアにおいても市民社会的な関係のあり方というか、国家への対抗のあり方としての一つの可能性の追求のように思うのですが、その場合の、市民社会というのはどういふ捉え方もしくはイメージをしたらいいのでしょうか。コミュニティのようなイメージで捉えるべき物ですかね。リージョナルな市民社会って。

篠田：さしあたって市民社会もう少し狭く捉えようといえます。市民運動が展開される場として。

小関：運動としてですか？

篠田：アジアの場合国家ってものが非常に強くて「公共性」を独占しようと

する傾向が強い。国家の介入による社会形成が行われ、各国において様々な社会問題とか経済問題、政治問題を引き起こしている。それに対抗しうるのは市民的な諸組織、諸運動だろうと思います。そこになにか市民のレベルにおける公共性を形成していく上での、あるいは社会を形成していく上での鍵があるだろうっていうような形で捉えています。

小関：なるほど。具体的に言えば、運動ですから柔構造を持っていて、特定の地域を拠点とした運動でも、たとえば外国人の人が加わったって一向に構わないわけですね。そういう形で、地縁的なつながりでもないし、単なるサークルのようなものなのでもなくて、文字通り人を巻き込んでいく運動体のようなそういうイメージですか、運動から市民社会を捉えた場合。

篠田：そうですね。

小関：それはだいたい市民社会の概念を変える捉え方かも知れませんが。そういう点に関して先生がた何かご意見とかございませんでしょうか、先ほどのツーリズムの問題とも絡む可能性があると思うのですけれども。と言うのは、訪れた人であるゲストと受け入れる人であるホストが一つの社会を作ったって一向に構わないわけですよ。

藤巻：アジアほど多様な社会、リージョンから成る空間はないと私は思うのですが、そのなかで公共性とかあるいは市民社会というコンセプトは、ヨーロッパ社会の中で自覚されている公共性とか市民社会という概念と、同じような感覚で意識されているものなのですか？

篠田：そこをまずは深めていかななくてはいけないと思っています。先ほど言ったように、われわれがアジアの国の公共性とか市民社会を語る前に、それぞれの国が独自の語り方をしているわけですね。その違いは何なのか。その違いこそ、アジアの各国の社会の違いの投影でもあるわけです。もちろん共通性もあるのですが、そこをまず理論的に明らかにすることが今の私たちの課題なのです。今は中国でも、たとえばハーバマスなんかをかなり議論して、理論的な論文を書いている学者が結構いるわけです。私も本当にびっく

りましたけどね。

そうした学者たちは、国家公共性ではなく、新しい中国のあり方を考える場合は市民のレベルでの公共性を作り上げながら国家に対してそれをどういう形で反映させるべきなのか、国家公共性をいかに乗り越えるのかっていう議論をしていますし、またそれと関連した様々な市民組織の運動も意外とあるのですね。もちろんそれはある時には国家主導の市民運動であったり、様々な形態を取っているのですが、無視はできません。韓国はご存じのようにネット市民社会論みたいな形でいわれるような、かなり激しい、かなり伝統のある市民社会運動が現実にあります。もちろん日本にもそれに似た状況がある。

そうした状況を踏まえて、公共性とは各国でどういう形で論じられ、市民社会がどういう形で論じられているかということを議論しながら共通性と異質性を見る中で、一体全体アジアの市民社会、アジアの公共性をどう議論するのかということを模索すれば、たぶん、共通の何かが出てくるに違いないという風に考えております。

藤巻：例えばマレーシアを例にとりあげますと、この国はご承知のように典型的な多民族国家ですが、マレーシア政府は国民統合政策を標榜しつつも、マレー人中心主義的な政策を推進しています。マレー人を中心とした国づくりに与する限りにおいてのみ、華人系あるいはインド系の人々の存在を容認するという、それがマレーシア政府の公式的な考え方ではないかと思えます。実際にマレーシアでも当然のことながら、市民運動、それから、公共という言葉の語られ方も最近非常に増えてきてはいるのですが、いずれも共通しているのは、ほとんどが華人系・インド系の運動家、たとえば弁護士であったり、知識人であったりによって担われているわけです。マレー人かどうかといえば、こうした運動にあまり関与しない、という、非常に明確な違いがあるのですよね。

ただそうしたなかにあっても、華人系・インド系の運動家たちは、NGO

であるとかNPOであるとかそういう風な団体組織を結成しながら、マレー系にも声をかけていく、民族の壁を越えてまさに公共権、公共的であるものを作ろうじゃないかという動きをしています。他方ではいわゆるアジアを中心とした他の国々の様々な運動を連携する、ネットワークを築くことによって、政府に対して市民社会、真の市民社会の構築という理念を突きつけていく動きをしていると私は感じるのですよね。その両側面を見た場合、篠田先生方が考えられているアジアというリージョンにおける公共性、あるいは、市民レベルにおける公共性っていうのはいったいどういう風に位置づけられているのかなっていうのが私の素朴な疑問なのです。

小関：たしかに難しい問題ですね。

篠田：難しいですね。特にリージョンとかグローバルなレベルで公共性を考える場合はもう一つナショナリズムの問題があります。特にアジアの場合は、極めて深刻な問題がね。非常に閉じられたというか排他的な感じでナショナリズムっていうのがあるとすれば、他方でたぶん開かれたナショナリズムというありかたもあると思うのですよね。そういう開かれたナショナリズムっていう形でナショナリズムが形成されていかないと、アジアにおける公共性っていうのは議論できない。私はナショナリズムは全然悪いことではないと思っています。それが開かれているかどうか大問題ですね。そういうのが可能なのかどうかっていうのが、たぶん突き詰めていけば、かなりの議論になるところでしょう。しかしそれを作っていかないと、アジアというのは、アジアの社会形成っていうのはどこかで頓挫するのではないかと危惧します。

小関：マスコミの報道を見ていると、ものすごい敵対関係が強調されているようにも見受けますが、例えば日本の学生と韓国・中国からの留学生の関係がこれによって極端に悪化したとは私あまり思っていません。彼らは存外冷静で、あれは国家の論理が先鋭的に投影されていることを解っていて、わりに冷静だなと思います。グローバル市民社会っていうのは、もしかしたら今

この立命館の留学生たちが作っているようなそういう感覚から生まれるようなもののような気がしますけどね。

篠田：ツーリズムとか、人の交流、人の移動、これがやっぱり大事だし、研究者レベルでは地道なアジアの研究者のネットワークを作ることがどっかで役に立つと思いますね。

藤巻：ある意味では自身が属する社会の様々なしがらみとかコード、規範から離れた空間に身を置いてみるのが効果的です。先ほどのツーリズムの絡みで比喩的に言ったら、空港は物理的に真の公共圏と言えるのではないかと感じるのですよね。フローしていく過程でさまざまな背景を負った多くの人が出会う結節点のような異種混淆の場が必要です。

小関：ある種の心地よさですね。共同体に守られているというのとは別の、自分がかびきから離れて見ず知らずの他人とフラットに出会えるような心地よい雰囲気や適度な濃度で瀰漫した、何とも言えない心地よい場ですね。

藤巻：不思議なところですね。

赤澤：今の論点に関わるわけですが、市民社会と言った場合に、西欧型の市民社会のイメージには強固な個人主義の伝統というのが前提になっているわけですね。ところが、アジアの国、日本でもそうですけど、頑固な個人主義というものは元々欠けているところから出発していると思うのですね。資本主義化が進展する中で色々変化があると思いますけど、たとえば中国人だったら中国人で家族の絆っていうのはすごい強烈なものがあってですね、国家との関係はむしろ希薄であっても、家の結合は非常に強いわけですね。そういうものをどう考えるのかっていうことがやっぱり問題として残るのではないかな。つまり市民社会という概念で包括できるのかっていう問題が残るような気がするのです。

それからもう一つ、たとえばEUなんかの場合だと、ヨーロッパの共通の文化的伝統があるわけですね。アジアの場合にはアジアという共通の文化的

伝統があったのかないのかということ、前近代においてはともかく、近代以降にはそれが切れちゃって、非常に微妙な問題です。確かに今日ではいろんなサブカルチャー的なもの、例えば歌であるとか、それこそ漫画であるとか、そういうのが東アジア世界に流通して、かつてよりも共通な文化的な基盤っていうのは形成されつつあるとは思っただけで、それがどの程度の意味をもつのだらうっていうのが問題として残ります。

つまり国家を超えるっていう場合に、文化の持っている共通性みたいなものが基盤としてなければ、やはり政治的な主張だけで結びつくのは難しいという気がするんですね。その点をどのようにお考えでしょうか。

篠田：その質問への答えは宿題にさせて下さい。

Ⅵ. 資料収集活動を主体にした基礎研究の重要性

小関：では次に赤澤先生が主宰しておられる「近代日本思想史研究会」のお話を伺いたと思います。この研究会は歴史が一番長くて1957年か8年頃から、もう55年ぐらい続いているわけですよ。非常に長く続いた研究会で、人文研とともにあったといってもいいぐらいです。過去の『立命館大学人文科学研究所紀要』の特集号に目を通しますと、日本史の分野のその時々時代の背負った問題意識が投影されているという側面と、もう一つ見て思ったのは、意外と学会の潮流からは適度な距離を保ちながらうまく研究テーマを数年ごとに更新してきたかなっていう気がするんですね。ですからそこに多くの人々の関心を包摂できたという面があるのではないのでしょうか。

特に1980年代の中頃からは近代京都とか、あるいは立命館とか西園寺とか、そういう対象とうまく交錯させながらやってきたなという感じがします。今は「近代日本思想史研究会」っていう枠組みの中で、戦後の憲法問題に取り組んでいます。グランドテーマと、3年ぐらいで更新しているテーマ



赤澤 史朗 (法学部教授)

とのかみ合わせ方って言うのがこの研究会のみそかなって思うんですけど、テーマの更新、展開の観点から今後の見通しとはどうでしょう。

赤澤：2005年から3期つづけて第二次世界大戦後の地方新聞紙上における憲法論説の収集と分析をテーマとしてやっております、最初の第1期は占領期憲法論議を、次の第2期は講和から護憲派が衆参院で1/3以上の議席を

占める時期、そして第3期が1950年代後半から1960年代前半を扱おうとしています。その中で今年が第3期の1年目で、あと2年やってそれで一応の区切りがつかます。1964年の政府の憲法調査会報告書までやって、この憲法論議の収集と分析の仕事はほぼ完結という形にしようと思うのですね。

課題としてあるのは、今回の総選挙でもわかるように、新たな改憲論が浮上しており、それとどう切り結ぶかです。これは2005年に研究を始めた当初から改憲論が浮上していたのですが、前に安倍さんが首相を辞めて改憲論が一回頓挫してちょっと後退したということはありませんでしたが、今回維新の会とか、自民党の安倍総裁とかの改憲論が再び注目されています。われわれが今研究の対象に取り上げている憲法論議の中の改憲論は、冷戦体制形成期において生まれたものですが、それは今日の冷戦崩壊後に浮上している改憲論とどう違うのか、またはどう共通しているのかっていう問題が、課題としてあると思います。

もう1つは、この間、メディア史研究はものすごく発展しまして、有山輝雄さんが中心になっているメディア史研究会は大変な人気で、『メディア史研究』という雑誌もかなりの号数が出ているだけでなく、研究会の報告予約も半年以上埋まっている状況です。

他方で、政治論と言う意味でのジャーナリズム史は、充分発展しているとは言い難い状況です。ジャーナリズム史ってのはやっぱり政論、政治論を軸にしているわけであって、そのそういう研究は意外に進んでいないのです。その意味では地方紙の憲法論説を収集分析するのは、独自の意味があるのではないかという気がしているのですね。梶居佳広君、佐藤太久磨君、吉田武弘君、眞杉侑里さんが本誌に書いてくれているように、網羅的な資料収集であればこそ、その作業の過程で学ぶことも多いわけです。例えば、平和と民主主義っていうのが全然別問題として論じられていたという発見とか、女性問題への関心やこどもの日への言及が多い事実とか、憲法問題の脈絡の捉え方が全然違うとかです。

小関：この研究会が、そういう若手研究者がそうした成果を生み出す母体になっているというのは喜ばしいですね。事実われわれが教えてもらうことも非常に多いですからね。それと、1960年代の冷戦下での改憲論と冷戦が崩壊した後の改憲論、同じ改憲論でも全然意味が違うっていうのは、詰めなければいけない問題です。これは先ほどの話、同じものでもそれが組み込まれた関係性によって意味や意義が転位するっていう問題なんかとも絡んでくるのではないかと思います。

篠田：この時期の憲法論議を固有に調査されているグループというか、個人って言うのはそれほど多くないのではないですか。そうでもないですか。

赤澤：先行研究は全くないわけではないのですが、地方紙は数が多いものですから、それに対する網羅的な調査はされていません。私たちはそれをやろうとしているわけですが、そうしたら梶居君の研究から意外なことも分かりました。というのは、地方紙の社説の中には共同通信の配信論説を一部修正したりして、自社の社説として転載しているもののがかなり見られたのです。つまり、社説と称しながら完全に自社の説なわけではないのです。違う府県の地方新聞を2紙取る読者はまずいないので、他府県紙に似たような論説が載っていてもバレないのです。

小関：そういうこともあるのですよね。全国紙が世論を形成するって面もありますけど、地方紙っていうものが各地方にいき渡っていて、それが世論を形成するという面も無視できません。ですから地方紙は意外と重要です。収集にあたっての作業量が多くて、四苦八苦しているということはありますけれども。まあこの研究会はベースとなる資料を収集して、それを材料にして研究を進めるというスタイルを50年ぐらい続けていますよね。

赤澤：そうです。資料発掘的な作業が一つの柱となっています。

小関：かつて岩井忠熊先生、後藤靖先生がおられたところに『中外』の目録を作ったとか。歴史学らしい特色を依然残しています。ただ他の分野への広がりって言う点で言うならば、もう少し他の分野の人たちの参加を期待したいですね。

赤澤：それは歴史学というのは、新しい資料発掘によって見えてくるものが大きい傾向があるためかと思います。

篠田：そういう成果発表みたいなのはね、この研究会でやるとかなり面白いと思いますけどね。かなり興味を持っている人が沢山いると思いますから。

小関：研究課題の設定の際には、今の世の中で改憲議論を中心に、憲法問題が取りざたされていることを意識はしていました。しかし歴史学者が、その憲法擁護とかそういうこと言う割にはあんまりその憲法を真正面から研究していなくて、それはまずいなという気持ちは今でも強くもっています。

赤澤：最近はやい人で50年代の改憲論を色んな形でアプローチしようって人が、従来の枠組みと違う枠組みで何か考えようと言う人が、出て来ていますね。

小関：ようやく出て来ましたね。そういう流れは喜ばしいことだと思います。若手研究者の人たちが、それぞれの関心から刺激を受けてくれているようだということも、今回寄稿していただいた文章を見て改めて分かって、嬉しかったですね。こっちが教えられることも多かったですし、逆にエネルギーをもらいました。

さてこれでひとわり、各研究会のお話を伺いました。すでに相当全体的な話に踏み込んでいる箇所もあるのですが、改めて今後の人文研の共同研究、あるいは、成果反映としての紀要というもののあり方などに関しまして、ご自由にご発言いただけませんか。私が改めて思ったのは、やっぱりこれまではお互いがお互いを知らなさ過ぎて、お話を伺ってみてはじめて「この問題や視点は自分たちの問題関心に触れてくるな」ということがけっこう多くて、こんなことなら、もっと早い段階でこういうような交流の機会を持ってもよかったということです。その辺なんかを含めて、皆さん、どうぞご自由にご発言いただければと思います。

VII. 国際的学術交流ネットワーク形成の実績と 今後の課題

篠田：ちょっと別な話になるか分かりませんが、「近代日本思想史研究会」は別として、他の研究会は国際的なネットワークをかなり広げつつあるし、そして、その国際的なネットワークが一時的なネットワークじゃなくて、かなり恒常的な形で研究交流に発展しつつあるというのがこの数年間の人文研の研究プロジェクトでの大きな特徴だと思うのです。

それを各研究プロジェクトが個別に発展させていくだけでなく、人文研全体として、こういう国際的なネットワークをどういう形でサポートし得るのか、どういう形でそれを外に「こんなことをやっている」という形で発信できるのか。人文研のこれからの発展から考えると、今これが大きな課題になっているような気がします。

そういう点では、「グローバル化とアジアの観光研究会」が国際ネットワークのプラットフォームをつくっておられるほか、われわれ「グローバル化と公共性研究会」も国際的なネットワークを持っていますし、恒常的な研究者の交流があるので、有効なプラットフォーム、ホームページをつくっ

て、いろいろな意見を交流し合うということをやりたいですね。いまは、必ずしもうまく推進できていなくて残念です。

そこで、われわれのプロジェクトにも裨益できることがあれば、他の研究会の経験を語ってほしいという気がします。

谷：全くその通りです。うちの研究会は世界各地の研究拠点と絶えず連携していくということを積極的にやっているのですが、しかし、もうすでに、ツーリズムのほうでやっておられたというのは、われわれにとっても、先例として非常に勇気づけられます。そこで、「こういうのが重要だよ」というノウハウみたいなものを共有させていただければありがたいのですが。

藤巻：いや、ノウハウはありませんよ(笑)。ただ、1つ言えることは、実態として最初は学内外のメンバーが持っている個人的なネットワークを有効に活用して、1本に束ねているということがあります。これが繰り返し行なわれることによって、やっぱり、われわれのコアメンバー以外に、ネットワーク上のコアメンバーというのが生まれてきて、例えばタイ、マレーシア、中国にも、そういったメンバーが生まれ、今度は、向こうは向こうで、そういったネットワークを自国で構築し、向こうのほうのネットワークに接続させていくというのが、現実的な方法として見えてきつつあると思うのです。

その時に、やっぱり重要なのはセミナーの持続性だと思うのです。スポンサーシップの観点から言って、この間ずっと継続的に主宰してきたのは立命館の人文研ですので、メンバーからすると、「立命の人文研」という名前が刻みこまれていて、「また、セミナーをいつやるんだ？」という問い合わせが来るくらいです。

今後は、こちらで開催資金を負担したとしても、タイ、マレーシアとか、そちらのほうでの研究を展開することが、より分厚いネットワーク構築につながっていくのではないかと考えています。いずれにしても、人文研のホームページが、私たちの研究プロジェクトのプラットフォームの窓口としての

役割をはたしている、僕は思うのですよ。実際、人文研事務局の中島久美子さんによって、他のところでは考えられないくらいに、up to dateに、情報を掲示していただいています。

ただ、1つ気になっているのは、各プロジェクトの研究活動というのは、それぞれが独自に動いていて、先生方もいろんな形でセミナーとかシンポジウムを開かれているのですが、「これが人文研全体の資産になっているか？」というと、ちょっと僕は、「もったいないな」というところがあると思うのですよ。それぞれが個別的過ぎちゃうとか。それらを人文研(JINBUNKEN)全体として、もっと観せるようなホームページ作りなどの工夫はできないものでしょうか。それに加えて、人文研の中でも、各プロジェクト単位の活動運営の推進というだけじゃなくて、それを人文研全体のものに高めていくような、何か仕掛けがいるのではないかな、というふうに思うのですが、いかがでしょうかね。

小関：それは、おっしゃる通りだと思います。

藤巻：「人文研には、こういうプロジェクトが今現在動いていますよ」とい



うことは分かるのですが、その上に立って、「人文研は、向こう何年間は、こういうことを共通課題としている」とか、「やります」というふうなメッセージがあったほうが、人文研自体の存在を強化していくことにもつながるし、対外的にも発信力を増すことになる。それによって、学内的にも、「人文研は、何やっているんだ」ということを、「可視化」させることができると僕は思うのですよね。

小関：それは力強いご提案です。人文研全体として、それは今後非常に重要な課題になってくると思います。ほかに人文研の発信力を高めるいい案があればぜひお出しください。

篠田：「グローバル化と公共性研究会」ですが、2007年から国際シンポジウムを毎回やらせていただいて、これは「人文研のプロジェクト」ということだから、こんなに継続できたのだと思います。外国の人たちの受け止め方も、「立命館の研究所が支援して開かれている国際シンポジウムだ」という形で、かなりオーソライズされているというか、変な言い方ですけども、かなり尊重されているというところがありまして、これは、ほんとうにありがたいと思っています。

小関：国際的なネットワークづくり、これは1つの課題だと思います。それに関して、谷先生の研究会では、かなり特色のある実践をされていると思うのですが、いかがですか。

谷：いくらかわれわれの活動も知られてきまして、こちらから人を派遣する、それから招待するだけじゃなくて、向こうから、「来たい」というような形で来てくれる人も少しずつ出てきましたので、今後、これをさらに拡充していきたいと思います。もちろん、海外の研究所においては、大量の研究者を集めるという所もあるのですが、うちの場合、そこまでの体力はまだ残念ながらありません。つまり、来ても宿舎がないとか、ですね（笑）。

赤澤：ゲストハウスがね。

谷：そういう物理的な問題も制約になっています。例えば、香港、コペン

ハーゲンなどには、ものすごく立派な施設を持っている研究所があります。われわれのところでは、そこまではできないのですが、少しでもそれに近づくような活動を繰り返し広げていくというのが、先ほど申し上げましたけど、間文化交流にもなります。それから、若い人に多く来てもらうことによって、間世代交流もできて、それを同時に推進することで、クロス掛け、たすき掛け的な交流を促進できるという効果も期待できます。

小関：なるほど。加國先生のところなんかは、テーマとの関係で、そういうことが自然にできそうな気がするのですがどうでしょう。芸術の創造性というのは、簡単に国境を越えますし。

加國：はい。ですので、国内のネットワークも大切ですが、海外からお招きすることが多くて、プロジェクトの予算を割とそれに当てているというところがあります。

今、谷先生のおっしゃったこととの絡みでいえば、ネットワークを作った後のネットワークの維持の仕方が重要になると思います。個人的な教員間のネットワークで来てもらっていて、その後も個人的なネットワークに留めるのではなくて、その研究者の所属している研究所と人文研でネットワークを結ぶということができるようになると、もっと、恒常的、継続的な関係になります。そういう形をつないておくと、その先生の友達がまた来てくれるとかいうつながり方をしていくと思います。

小関：それは重要でしょうね。

加國：人文研のプロジェクトで来てもらえる人は、その人の所属しているところと人文研でネットワークをつくることができたらいいなと思います。

藤巻：研究所間の学術交流協定を活用できませんか。

小関：それに加えて、世界の人が興味を持ってくれるテーマを効果的に設定して人を呼び、それをセレモニーで終わらせないことが重要でしょう。かつての国際学術学会って、どうしてもセレモニーみたいなもの、「開催した」ということだけ意味があるみたいなものが多かったのですが、最近は内容のあ

る実質的なものが増えてきました。

谷：セレモニーにしたら、絶対に研究は発展しないですからね。たまには必要だけど。しかし、継続した研究会には実質的な研究交流のグループがあって、それが人文研ではようやく定着しつつあるように思います。

小関：ええ、そうですね。それ、ぜひ、成果を残せるように積極的にやっていききたいですね。成果を残していくと、いったん関係が薄くなっても、この成果を前提に、また新たに始められますからね。著作物をはじめ具体的な成果を積み上げていくことが重要です。

赤澤：日本史学の場合、国際交流をするとなると中国、韓国の方、またはアメリカ人で日本史をやっている方との交流に限定されがちなのをどうするかというのが今後の課題ですね。

小関：学术交流の点からいうと、日本人の研究者が、日本史以外のテーマで交流することはなかなか難しく、それこそ、関係性自体を議論するような交流の仕方というのは、今のところ、まだ、そこまでいってないというのが、悲しいかな現実です。

例えば「儒教的文化圏」という発想はあるのですけれども、関係それ自体を焦点とした研究交流というのは、個別的なもの以外にはまだ進んでいないという状況ではないでしょうか。

赤澤：ただ、中国・韓国の研究者と交流しますと、2000年代の初めぐらいまでは、国のナショナリズムが研究に濃厚に投影されていましたが、2000年代の途中から、韓国でも、中国でもかなりナショナリズムから自由な研究が現れてきたことを実感します。研究交流を実質化しやすくする変化だと思います。

小関：天皇制というものに関しても、われわれが思っている以上に、タブーや固定観念から自由になって、アプローチしていますよね。あの変化というのは、やっぱり情報の開示とか世代交代などの影響でしょうかね。

赤澤：それこそ、先生が先ほど言われた市民社会の問題と関連するのだと思

いますけどね。

谷：人文科学研究所英文紀要は人文研のプロジェクトの国際化にかなり役立っているのではないのでしょうか。あそこに、いろいろなプロジェクトが特集で論文を載せて、それを見てもらって、それをまた日本語にするという、日本語の翻訳も両方うちの場合はやっているのですけれども。かなり関心を持たれているようですが、いいことだと思います。

藤巻：私のところにも最近、東南アジア、東アジアの辺りから人文研の英文紀要に「投稿したいけど」という声もありますしね。また間接的にコメンターを経由して、「原稿を載せてほしい」という依頼もあります。ホームページを経由して私たちの研究プロジェクトが目にとまる機会があるようですね。「お前のところへ行きたい」という希望がバン格拉デッシュから来るとか、「そのプロジェクトに関心がある」とかね。依頼に添えないものもあるけれど、情報や成果を発信し続けることによって多くの人の目にとまるのはいいことです。

小関：英文紀要というのは、それだけ多く読まれるのですね。

藤巻：そのようです。それに対応して、研究所の名前について言えば、「人文研」を「Institute of …」とするだけではなくて、「JINBUNKEN」という略称も掲げたらどうでしょうかね。「立命館」も、海外の研究仲間も含めて僕らの間では、もう、「RITS」って言っているのですから。

谷：今のことに関連して、人文研に外国語に強いスタッフを入れていただくと、やりやすいですよ。

小関：そうですね。それは、もう大学の側に要求しないと駄目ですよ、研究政策の一環として。

加國：研究所に外国の研究所との交流を専門に担当するスタッフを増員することが必要ですよ。

おわりに

－萌芽的小規模研究会への期待－

小関：今日は多くの話題が出ました。私は今日この座談会をやってみてけっこう安心したところがあります。と言うのは、学問の「たこつぼ化」うんぬん、かんぬんとよく言われますが、それに反して、問題意識は収斂をしつつあるようにも見受けました。話題の焦点になった「関係性」という話なんかは、その例ですが、ぐっと重要なところに関心、視座が収斂しているのかなと少し勇気づけられました。

僕は、そういう感触を抱いたのですが、先生方はいかがでしょう。ツーリズムにせよ、間文化にせよ、憲法にせよ、公共にせよ、暴力にせよ、全部そういうところに、「ここがやっぱりカギになるのではないか？」というような面が、ほの見えているのではないかという気がするのですね。

今回せっかくこういった機会をもてたわけですから、以後もこういう機会をまた設けて、たまにお話ししたいなと思いました。今度は、この萌芽的研究会の方の人たちも含めて、できればそういう場を設けたいと思います。「知識基盤社会における大学の自治の制度構想に関する国際的な公法学的比較研究」(研究代表者 中島茂樹)、「グローバル化時代のポピュリズム研究」(同 加藤雅俊)、「戦後沖縄の基地周辺における都市化の歴史地理研究」(同 加藤政洋)、「人文学・社会科学における質的研究と量的研究の連携の可能性研究」(同 筒井淳也)、「戦後の京都地域における歴史学の展開過程に関する研究」(同 田中聡) など面白そうなテーマが多くあります。この中から、将来的には、人文研の戦略拠点研究を支えてくれるような研究が成長してくれることを願っています。

最後にその辺の見通しや希望とかを各先生方から伺って、この座談会を閉じたいと思います。

藤巻：私たちの初期のころの「貧困の研究会」も、最初のころは年間10万円

ぐらいの予算規模の「課題別共同研究」として行われていましたね。でも、あれは非常にありがたくてね。予算は10万円と小額だけれども、しかし、それでも今のコアメンバーが熱心に集まってやっていたのですよね。

小関：そういう研究会があったんですよ。年間10万の予算でやる「課題別研究」というほんとうに規模の小さい研究会が。

加國：暴力論も最初はそれもらって始めました。

藤巻：だから、それから考えたら、小さい種だった研究会が、大きく育ってきているなと僕は思うのです。

小関：ただ、あれを1回潰してしまったのですよね。はっきり言って、開店休業状態のところもあったので、「もう、これはええんじゃないか」ということで、閉じてしまったのです。「こういうこぢんまりとした研究会のよさがあるのだ」ということで、惜しむ声もあったのですが、1回閉じてしまって、少しもったいないことをしたかなって今になって思いますね。

谷：研究会って生き物ですからね。生成、発展、没落するものですから。やっぱり勢いがあるところに小額でも支援して行って、それで、モノになる場合もあるし、ならない場合もある……。

小関：最初に、あまり大きな予算をもらってしまうと、使うのに困ってしんどくなるということがあります。1年に10万という、ほんともう、研究会を開催するだけのお金なのですけど。そういうこぢんまりした研究会ならではの良さと重要性は確かにあります。

加國：「大きい予算を取れる研究を」みたいな方向があるわけですが、少ない予算で継続しているほうが、大きい予算で1発やるよりも、学問的には意義があるということもあります。その認識は持つべきです。実際、「予算が小さい研究会＝駄目な研究会」みたいな偏見があって、それは間違っていると思う。

小関：小さい予算規模の方がネットワークのいい研究会運営ができるという意味もあるしね。ですから今回の萌芽研究会は、予算規模は50万ないし30万

なのですけど、ぜひ大切にしたいですよ。もし先生方の方で、他にもこれといった研究活動があったらぜひ声を掛けていただいて、ポンと背中を押していただくと、うまく成長してくれるものがあるかもしれません。ですからよろしくお願いします。

篠田：全体として、科学研究費の獲得がずいぶん大学全体で推奨されていますが、それだけだと研究が短期でたこつぽ形になってしまう。大学全体としていろんな部署から集まって研究会をプロジェクトとしてやっていくという勢いがつきにくい面があります。そういう点では、今度、萌芽的研究会が5つあまりできたということは、ちょっと僕は、明るい材料だと思っているのです。ここがもう少し広がっていってくると、人文研としては次期の発展につながっていくという気がします。

谷：ある意味で水を差すような話になるのですが、例えば、衣笠総合研究機構の会議なんかでも「立命館全体で何億円もっている」みたいな、ああいふ数字で出されると、小さい研究会は肩身が狭くなりますよね。「継続は力なり」というものに対する、ちょっと思いやりみたいなものがあるといいかなと……。

小関：理工系とか、自然科学系を中心にしたら、巨額のお金を使うプロジェクトが、どうしても前面化しますね。こういう人文科学関係って、調査を除けば、地味にやろうと思えば、ほんとに地味にもやれる分野です。そういう研究会をもうちょっと温めてもいいかなという気はしますね。だから、例えば本誌に寄稿してくれたような人たちが、将来、割に小さな研究会から始めて、やがてそれが大きなプロジェクトに成長するというようなことを期待したいです。

篠田：衣笠総合研究機構が中心でなく、各研究所である程度そういう若手の研究をサポートできるような予算を増やし、使えるような形にしていくことが研究所の発展のためにも必要でしょう。

小関：僕も、全部把握しているわけではないですが、研究活動は院生レベル

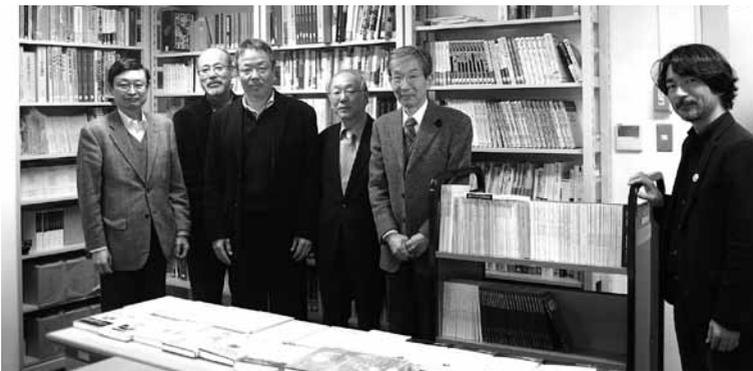
でけっこう自主的にやっていますよね。読書会のようなものもあるのでしょうけど、それ以外にも、勉強会みたいなことをやっているの、それをうまくすすくって、少しずつ育てていくみたいなことを考えられませんかね。

篠田：それを、衣笠総合研究機構というより、研究所でやるべきだと僕は思います。研究所は、やっぱりよく掘んでいるし、やはり研究所のレベルで、インキュベーター的な研究をサポートできるような、そういう予算と権限みたいなものを持ったほうが、研究所は発展すると思いますね。大学全体として、研究所の位置づけというのが、少しずつ小さくなってきているのは残念ながら印象としては否めない。「研究大学」という形でいっているわけだから、やっぱり、もう少し研究所を中心として、「もっと、ここを育てよう」という発想を持ってほしいですね。

小関：なるほど。分かりました。厳しいですが、大変参考になる意見です。今日の座談会は、私にとっても大変勉強になりました。普段、なかなか聞く機会のないことを聞かせていただいて、勉強になりましたので、ぜひ、こういう機会をまた、折に触れて設けていきたいなと思います。

お話もあらかた出たところで、これで座談会を終了させていただきたいと思います。どうもお忙しいところ、ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。



座談会を終えて